

まちづくりネットワークえひめ

舞 たらん

VOL 77

2003.7



アングル

子ども達にメダカの里を 日本めだかトラスト協会副会長・童話作家／大西伝一郎 …… 1

(特集)

『こどもの視点でまちづくり』

せきぜん子のむらづくり

関前村／島崎 義弘 …… 2

伝説を創った小さな監督たち

松山市／泉谷 昇 …… 4

地域の「お宝」と異世代交流

久万町／向井 理恵 …… 6

高校生の視点と話題性

大洲市／河野 達郎 …… 8

論談—まちづくり—

子どもと歴史的場所の相互敬愛の関係づくり

—子ども参加のまち育て—

NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事／延藤 安弘 ……10

キラリ光るまち

りんご並木五十年

長野県飯田市／尾曾 善彦 ……12

引き算型まちづくりの事始め(八)

内子町／岡田 文淑 ……14

トークナウ

思いを形にする

新居浜市／水田ひとみ ……16

歴史文化をまもり伝えるという仕事の社会的意義

宇和町／高木 邦宏 ……17

嬢のかわら版

あかがね(銅)の里から(その1)

新居浜市／前原 和子 ……18

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

近代化遺産シリーズ「戦時遺産について」

岡崎 直司 ……20

まちづくり考

「境界領域」を考える

(財)えひめ地域政策研究センター統括部長／脇 安生 ……22

研究員卒業レポート

地元の課題・自分の課題

内海村／池田 大作 ……24

研究員レポート

石畳地元学に参加して

梅村 裕治 ……26

自然を活用した地域づくり ～三重県宮川村～

橋岡 勝一 ……27

嬢のくにフラッシュ

センターからのお知らせ ……28

Information

センターからのお知らせ ……29

特集

「こどもの視点で

まちづくり」

地域にこどもたちの発想・意見を取り入れることで、こどもたちの地域への関心が高まり、地域を好きになっていくと思います。そして、そのことがこれまでとは違った新しいまちづくりにもつながっていくかもしれません。

そこで今回は、おとなでは思いつかない柔軟で意外な発想を持った「こども」にスポットを当てて、「こどもの視点でまちづくり」をテーマに特集を組みました。

「何をやれば子供はここがいなと思うかそれがまちづくりの理念である。」

これは、有名な作詞家阿久悠さんの言葉です。

(編集子 橋岡)

表紙の言葉

太陽がじりじりと照りつける砂浜で、「そうれ! そうれ!」と掛け声をかけ、子ども達と一緒に暑さも忘れ、手探り寄せるは地引網。

ぐいっぐいっと重さを感ずるのは、海の幸の期待なのでしょう。いや、重かったのは、海藻の多さでした。その中からタコ、カニ、ベラ、ホゴなどの魚を見つけた子ども達の嬉しそうな様子。これが本当の海からの直行便。

越智郡大西町九王海岸

柳原あや子





子ども達にメダカの里を

日本めだかトラスト協会副会長・童話作家

西条市 大西 伝一郎

日本の小川や水田にすむ代表的な魚。私たちの身近にいたメダカが、絶滅の恐れがあると、環境庁が「レッドデータブック」で発表したのが一九九九年二月のことでした。

「まさか、メダカまでが」と、信じかねた

私は、春を待つて、近くの小川や水田を調べ歩きました。すると、メダカは泳いでいましたが、確かに減っていたのです。

私は、安堵すると同時に、メダカを絶滅させてはいけないと思ったので、全国のメダカの里を守っている人たちと共に「日本めだかトラスト協会」をつくりました。

そして、メダカの里を、子どもたちに残す運動をはじめました。幸い、全国各地の地域メダカを保護している方々と、手をつなぎあうことができました。

西条市でも青年会議所が創立三十周年記念事業として、市内の中心部に、ビオトープのメダカ池「御舟池」を造って、「自然観察探

検隊」を発足させ、小学生を中心にメダカを保護する活動を始めました。

県下でも、各地で、子どもを中心に、地域のメダカを、保護する運動が行われていますが、それでもメダカは減り続けています。

今年、三月に発表された「愛媛県レッドデータブック」でも、メダカは、絶滅危惧種になっているのです。

私は、メダカのすめる小川や水辺を、子どもたちにどうしても残したいと思っています。身近に生きているメダカを失うことは、人間の優しさや命の尊さを感じる心を奪うことにつながっていくと考えるからです。

人間の優しさや命の尊さを知る心は、幼児期にほとんど培われます。三才ころの幼児は豊かな感性が最もよく育ちます。この時期から小学生の時代に、小川や水辺で遊びながら小さな生き物にふれさせることが、大切だと

思うのです。

野鳥でさえ、幼鳥は、親鳥の鳴きかたや行動をまねるといいます。

刷り込みといって、親鳥の鳴き声を覚えたウグイスは、その親の通りのさえずりを生涯続けるといわれています。

鳥などどちがつて、われわれ人間は、もっと豊かな感性をもっています。

その人間にとって、最も大切な子どものころに、小川で泳ぐメダカにふれることは、素晴らしい原体験を得たことになります。

掌の上で、陽光に銀鱗を輝かせるメダカは一生その人の心の中で、金の鈴となって、美しい音色を鳴り響かせると思うのです。

そのことが、自然と人間が共生するという前意識となって、その人の生き方にも、大きくかわつてくると考えるのです。

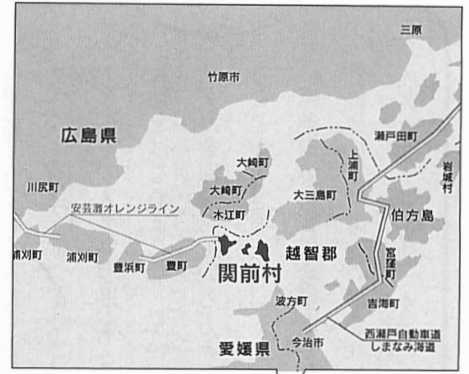
メダカは、緩やかな水辺がなければ子孫を残すことが出来ません。

水田が整備され、用水路がコンクリートになって、メダカのすめる場所が、少なくなってきた今こそ、私たちは、自然を大切に、メダカがすむことのできる、小川や水辺を、二十一世紀に生きる子どもに残さなければならぬと思っています。

せきぜん子のむらづくり



関前村
関前村社会福祉協議会
事務局長 島崎 義弘



私たちが住む関前村は、現在人口八百五十八人で高齢化率五十・七%となっております。まさに二人に一人が高齢者という超高齢社会であります。主要産業は、ミカン栽培と漁業です。昭和四十五年ころまでは、小大下島の石灰石採掘などで栄え、海運業も盛んでしたが、石灰石の採掘が中止となり、果樹、漁業の地場産業の衰退に伴い、過疎と高齢化が急速にすすみました。

自分史づくりで世代間交流

このような超高齢社会の中で、岡村小学校全校児童二十二人が地域福祉活動や、むらづくりに積極的に取り組んでいるので紹介します。

まず、子ども達がお年寄りの自分史づくりを手伝う事業を行っています。昔を学びふるさとを知る作業を通じて、子ども達にふれあい大切さを伝え、世代を超えた地域の結びつきを再構築する試みです。総合的な学習の一環として平成十三年十二月から始めました。

児童は六班に分かれ、六人の高齢者宅を訪問し、生い立ちや戦争体験のほか、昔の村の様子、幼少時の遊びや祭りなどを聞き取り、地域紙としてもまとめました。まとめあがった自分史は、児童、お

年寄り、先生、関係スタッフが集まり、自分史発表会として披露して、お年寄りへプレゼントしました。

そのお返しに、あるお年寄りは「ジンゴマ」と呼ばれるコマを披露してくれました。円筒状のブリキの胴体をむち打ち回転させます。「こういう遊びがあったことも伝統。子ども達に伝えたい」と語っていました。また、児童に「地域で変わってほしくないこと」と質問され、それに対して、児童は「人の輪みんなで助け合うこと」と答えていました。

市町村合併が視野に入り地域の特色や連帯感が希薄化するとの懸念がある中、児童が成長する過程でふるさとを見つめなおす意味は大きいと思われれます。

合併後の地域、未来を考えよう

本年二月二十七日、初めての「ジュニアシンポジウム」交流会が開かれ、今治市日吉小学校の五年生三十二人が岡村小を訪問、同校の五・六年生十人と地域の産業などをお互いに紹介し、交流を深めました。関前村は平成十七年一月に今治市と合併が予定されていますが、その合併を前に島嶼部と陸地部相互の地域を理解しようと、両校と両自治体の社会福祉協議会がこの交流会を企画しました。



自分史づくりで子ども達が地元の高齢者を訪問し。生い立ちや昔の村の様子などを聞き取りながら交流を深める。



◀ まとめあがった自分史 ▶



日吉小の子ども達は、今治のタオル産業や校区内の商店などを説明、岡村小の子ども達は石灰石採石で栄えた小大下の歴史や村基幹産業のかんきつ栽培、漁業について紹介しました。最後に「いっしょにくらうわたしたちの未来」と題し、新「今治市」のまちづくり案を

両校児童が共同で作成。「今治を日本の首都にする」「野球チームをつくる」「激安遊園地をつくる」などのアイデアを発表しました。また七月に交流会として「島ごと丸かじりフィールドワーク体験」を企画しています。

今治市と越智郡十一町村の合併において、今後このような異なった文化を持つ地域がひとつの行政区域になっていく中で、こうした子どもの交流、体験から得られるものは大きい事ではないでしょうか。

伝説を創った小さな監督たち



松山市

特定非営利活動法人

アジア・フィルム・ネットワーク

事務局長 泉谷 昇

平成十四年八月二日

晴れ渡った土曜日、「まつやま子ども映画塾」は二十四人の子も達と松山城インフォメーションセンターで行われました。本企画は地域に何を残したか？紙面を借りてご紹介します。

アジア・フィルム・ネットワーク

私たちは、国内外の映画・映像撮影を誘致支援する「フィルム・コミッション」活動を続けるNPO法人です。活動を通して、フィルム・コミッションが生み出す可能性（地域経済の活性化・新しい観光振興・物語性豊かな地域づくり・芸術文化の振興）を体感できるように、様々な機会を演出しています。

【えひめ映画塾】参加者自らが愛媛と映画の接点を考え、提案する企画。

【子ども映画塾】子ども達の創作物語を通して、地域の魅力を再発見する企画。

【えひめドラマ塾】フィルム・コミッション活動の体験として、地域舞台のドラマを創作する企画。

映画は誰でも楽しめるエンターテインメントです。子ども達の想像力を活動に生かせないか？と思ったのがきっかけとなり、子ども映画塾は誕生しました。

二十四人の小さな監督

物語の題材は築城四〇〇年を迎えた松山城とし、伝わる伝説を参考に「新しい伝説」を創ることにしました。創作にあたり、伝説の「結び」は変えず、物語の流れ（起↓承↓転）を想像し、「結」と合わせ、「四コマ映画」として発表してもらいました。

創作手順は「テーマ検討」↓「構成検討」↓「シナハン（取材）・ロケハン（撮影地探し）」↓「撮影」↓「編集」と、一般的な映画制作を参考にしました。

子ども達は四人一グループになり、各グループには「ナビ」と称した相談や引率の担当者配置しました。アイスブレイクで会場を和やかにした後、サンプル物語を上映し、創作開始です。松山城に伝わる伝説（毘沙門狸、戸無門、鳴かない蛙、長者ヶ原、笑いの聞こえる池など）が発表されました。

印象的だった二つの演出

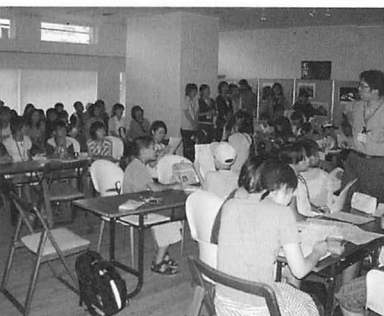
「ハサミを貸して下さい」と、男の子からお願ひされました。（何でだろう？）と思いつつ渡すと、物語に竜が登場するとの事で竜の形を器用に切り抜いていました。また、撮影時は竜をそのまま使用



物語の創作



創作風景 演技している子ども達



各グループの発表

せず、陽にかざして地面に映った「影」を撮影したと聞いた時は、その演出力に唸ってしまいました。

もう一つ。熊を主人公に考えていたグループがありました。手持ちはキーホルダーの小さな熊だけでした。そこで用いたのが「遠近法」で、撮影時に熊を手前に配置し、自分達は後ろに下がって撮影する事で熊は視覚のトリックで大きく見える。いやはや、想像以上に子ども達は、魅せてくれました。

いよいよ発表

各グループは知恵を出し合い、シーン（起↓承↓転↓結）に最適な演出をしよう、と、アングルを考えたり、撮り直しをしたりと、奮闘ぶりがナビから続々と報告されました。撮影を終え、編集と発表練習の頃には、物語を見ようと保護者などが次々と詰め寄せ、会場は満席となりました。

発表の前に、まず創作の健闘（話し合いで物語を創り、撮影した数十枚の写真から四枚を選び、発表方法まで考えた事など）を称えました。と、言うのも発表自体は二分で終わる短いものですが、その二分間の演出に注いだエネルギーは膨大だった事を紹介したかったのです。

配役があつたり、声色を変えて発表する姿は既に映画人で、コメディ風からホラー風まで計六本の「伝説」が誕生しました。

発表を通し、子ども達は私たちが思う以上に「地域を見つめている」事を感じました。発表後、「普段では学べない内容だった」「地域を見直す良い機会になった」など、多くの感想をいただきました。

終わりは次への序章

「楽しかったね、また、会えたらいいね！」

「うん、面白かった！今度はいつする

ん？」

半日を一緒に過ごした一体感は、終了後も余韻を残し、別れを惜しむ声を多く聞きました。

振り返ると本企画は、子ども達に「想像力や発想力の機会」、地域に「魅力の再発見・再評価の機会」、私たちには「自信と活動の意義」を残したと思います。

地域の魅力をもっと発見する為にも、子ども達を主人公、地域を舞台にした本企画は今後も続けます。

今年も開催決定！

この原稿の執筆最中に「こども映画塾二〇〇三」の開催が決まりました。

今年も松山城から道後へと舞台を移し、狸を主人公にした物語を創作します。今年は子ども達とまた創れる楽しさと、今年はどうな物語に出会えるのかの期待感で一杯です。

『こども映画塾二〇〇三』

日時 平成十五年八月二日（土）

午後一時～午後五時

八月三日（日）

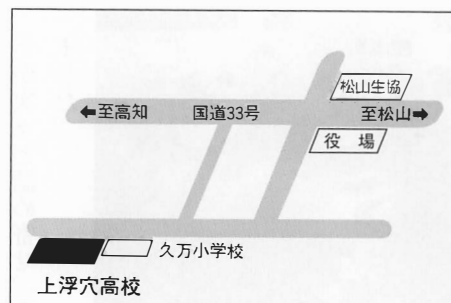
午前十時～午後五時

会場 松山市立子規記念博物館

地域の「お宝」で 異世代交流



久万町
愛媛県立上浮穴高等学校農業クラブ
会長 向井 理恵



日本学校農業クラブ連盟は、昭和二十五年農業に関する学科を置く高等学校で結成された全国組織です。
愛媛県内には、現在十四校、約二千八百人のクラブ員が所属しています。

「久万大豆」という地域の「お宝」

私たちの住む上浮穴郡はかつては松山藩の御納戸と呼ばれた久万山郷で、江戸時代後期に書かれた「松山往来」には、久万山大豆の記述があります。私たちは、郷土料理を研究するなかで、昭和三十一年に愛媛県農業試験場久万分場が久万山大豆から、品質がよく風味があり遺伝子組み替えがなく、低農薬栽培が可能な「久万大豆」を作出したこと、その後、価格の安い輸入大豆に圧倒され幻の大豆になっていることを知りました。その絶滅寸前の「久万大豆」を愛媛県農業試験場が保存、「地元高校でも保存してほしい。」と種をわけていただきました。

「久万大豆」の栽培と異世代交流

その年、百二十粒の「久万大豆」で試験栽培に挑戦、約5kgの収量があり、「久万大豆」を使った特産品開発に取り組みました。特に、「久万」の文字を入れた「文字入り豆腐」は大変な反響を呼び、美川



「久万大豆」100%の竹豆腐づくりで
保育園児と異世代交流

村出身の目下武一さんからは竹豆腐作りの技術を教えてもらいました。

翌年、試験場から分けていただいた2kgの「久万大豆」は八十kgに増え、「久万大豆」100%の竹豆腐として町内の物産館に出してみたところ大変好評でした。そこで、この竹豆腐製造を保育園や特別養護老人ホームで実演、異世代交流活動を行うことにしました。

まだまだあった地域の「お宝」

地域には「オイトウモロコシ」「イラレコ」の他、絶滅危惧トウモロコシとして、ジーンバンクには久万山郷から採取した二十二種が保管され、その中から五種のトウモロコシの配布を受け、比較栽培を実施しました。

地域の反応

私たちの地道な活動は広報誌に掲載、



間伐材をプランターカバーに



上浮穴地区青年農業者連絡協議会でのプロジェクト発表会

間伐材は製材した後、子供から高齢者まで製作可能なプランターカバー作りのために、四つの部品にキット化し、さらにねじ釘を使ってプランターカバーに組み立てる方法を採用しました。その後、プランターカバーの

栽培した「イラレコ」は「はな粉」していただき、「トウキビ餅」「トウキビご飯」、「はな粉コンニャク」の郷土料理を地域の人たちから伝授してもらい、保育園児や養護老人ホームの入居者の方々の異世代交流を実施しています。その後、この活動を機に、ニッポン東京スローフード協会を通じて、イタリアの本部に

園芸ボランティア活動への利用

また、当地は四国山地の山間部にあり、総面積約七万二千haの約九十%が森林で、民有林の人工林率も九十%と林業が盛んな地域でもあります。しかし、放置される間伐材も多く、この利用方法の一つとして、プランターカバーなどの立体装飾用品に活用し、地域交流に役立てれば立派な「お宝」に生まれ変わると考え、間伐材の有効利用プロジェクトを考えました。

園芸療法的活動への試み

さらに、この活動を園芸療法的活動へ発展させることにし、愛媛園芸療法研究会の研修会で園芸療法を学習しました。その後、養護学校、医療機関、リハビリ機関で、プランターカバー製作活動による園芸療法的活動を実施しました。また、地域の集材加工工場で規格外として出される集材材を使って、車いすを利用される方のための「持ち上げ式花壇」を製作。園芸療法を実践している介護老人保健施設に寄贈し利用してもらいました。

この活動は、日本学校農業クラブ京都大会で優秀賞を受賞。さらに、「元バネ」と呼ぶ間伐材の地際部分を使った豆腐キツトなども考案するなど、研究主題「間伐材を有効利用した地域交流の試み」として平成十五年度から二年間、愛媛県の研究指定を受け、現在も研究中です。

失われつつある郷土料理を次世代へ

WEB公開もされました。地域のみならずへの「久万大豆」の種子の配布活動、農業後継者協議会での発表、地元民放やNHKテレビでの放映、さらには、地元新聞には久万豆腐を応援する投稿記事、配布した方からのお礼や励ましの手紙や問い合わせが多数寄せられました。

放置される間伐材も立派な「お宝」

も登録。失われつつある在来農作物と郷土料理を次世代につなぐ「久万の方舟」活動として今後も続けていきたいと考えています。

高校生の視点と話題性



大洲市
株式会社おおす街なか再生館
取締役統括部長 河野 達郎



高校生は商店街を見ていた

大洲市を始め周辺地域から、八百人の生徒達が始めて愛媛県立大洲高等学校。その学舎は、現在復元工事が着々と進んでいる大洲城を一望することのできる小高い丘の上にある。学内には江戸時代の陽明学者「中江藤樹」も一頃を過ごした「至徳堂」があり、歴史的観光ポイントとしても見逃すことはできない。

今をさかのぼること五年前の九月一日、当時としては後発組だった「TMO」についての研究特別委員会が、民間人を取り込んで、大洲商工会議所の中に設置された。それまでの数年間、私を含めた民間人と当時の行政の若手連中が集まって結成された「大洲の将来を考える会」において、この街に対する思いをいろいろと暖め続けていた。この委員会が、その思いをぶつけていく良い機会となった。

大洲の街は、肱川を挟んで、北側を「肱北」商店街、南側を「肱南」商店街と称する。肱川と盆地という地形の織りなす自然現象（肱川あらし）や古い町並みなど独特の雰囲気有するものは「肱南商店街」である。我々の取り組みは主にこの商店街を中心に考えてきたものであったため、委員会においては、まず「肱北商

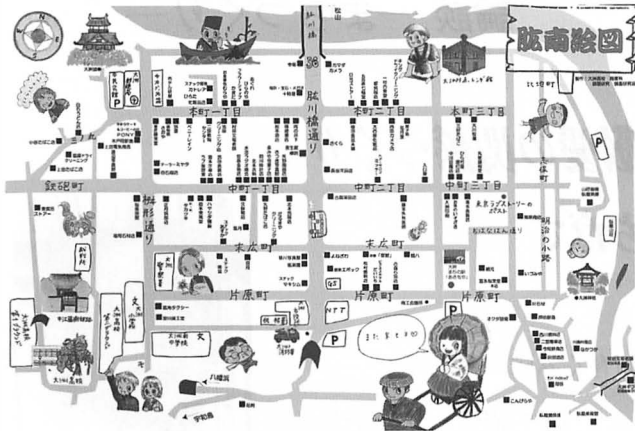
店街」に焦点を当てた活動を始めた。

毎月二回程度商店街のメンバーと話し合いを重ねていく中で、「高校生は、朝は右側を歩いて登校するのに、なぜ下校時には左側を歩くのか？」という素朴な疑問が生まれた。原因は車の流れで、高校生は毎日朝と夕、車の流れの少ない商店街を歩き、街をよく見ていたのである。すべてのきっかけはこれだった。

以来、大洲高等学校も、年度ごとに、学校をあげて全面協力をしていただくことになった。我々にとってはもちろん、学校にとっても、生徒達の課外授業の場として有効活用できるといいう、いい相互関係が生まれた。

「話題性」が次々と生まれる

「超進化的IT革命進行中」という状況の中で、良きも悪きも劇的な社会環境変化を繰り返して続けている昨今。「デジタル」「インターネット」「携帯」等の主役は、なんとと言っても「情報」である。しかし、進化し続けているのは「手段」であり、「情報」そのものは「アナログ」がもてはやされている時代である。主に「アナログ」にしか対応できない我々の年代とは違って、今の子ども達は「宮本武蔵」的な感覚を兼ね備えている。そこ



高校生手作りの「肱南商店街絵図」(左)と「施設マスコットシール」(右)



新しい「郷土料理」高校生試食会

から飛び出す様々なアイデアや意見を街づくりの中へ取り込んで行くことで、新しい「話題性」が次々と生まれてくる。私は、この「話題性」こそ「街の元気の源」であると考える。そして、生徒達がこれらの動きに関わり続けてくれることによって、自らの「故郷を思う気持ち」が高揚するというおまけ付きだ。

平成十一年に実施した、高校生を対象とする「来街者意識調査」と、これに基づく「交通流量調査」がすべてのスタートだった。以後、「高校生と商店街の公開討論会」を平成十二年から十三年にかけて開催し、昨年の大洲まちの駅「あさ

もや」のオープン時には高校生手作りの「肱南商店街絵図」と「施設マスコットシール」まで生まれた。

これらの動きは「話題性」としての効果が十分で、関わり合っている我々や関係機関等にとっても、街なかに再生に向けた連携を強化していくための良いクッション的な役目を果たしてくれている。

本年は、当社の設立意義でもある特産品の開発育成の中で、「大洲城高虎シリーズ特産物」の開発・発売を行っている。すでにその中で、これらの特産物などを食材にした新しい「郷土料理」高校生試食会も開催した。これがこの夏の「話題の目玉」となりそうで、シリーズ特産物の背景ストーリーも制作してくれている。

街づくりと言えば、何かハード的な機能をその街に持たせれば、集客できて活性化できるということを誰しも連想する。しかし、進化し続けるこの時代、ありきたりな話題性では逆に二〜三年で埋没してしまう。だからこそ、大洲という街の「アナログ」な雰囲気を生かした「情報発信」に、高校生の視点は不可欠な要素であると考えられる。

子どもと歴史的場所の相互敬愛の関係づくり

——子ども参加のまち育て——

愛知県名古屋市 NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事

延藤 安弘



親密な柔らかい場所への 畏敬のココロを育くむ

子どもが自ら住むまちをタンケンをして、自らの目でまちを見ることは、五感・五感を通して見ることで、不思議なものと思いがけない意外性に全身をひらき、ひらかれていく。そのことを通して、わがまちに対する愛着心や身近な環境に能動的にかかわろうとするセンスと力が育くまれていく。

その際、子どもは、現代的な建築や地域空間にありがちな無機的なハコモノにも面白さや大人が気がつかない魅力を発見するが、自分のまちの一部に古い伝統的な文化的な場所が存在する時、彼らの眼差しはいっそうそれに異常に吸い寄せられる。まるでなつかしいふるさとの記憶をよみがえらせるように。恐らく、子どもたちには具体的生活・居住体験がなくとも、人間にとって、伝統空間が孕む生き物のように親密な柔らかい場所への共感、人類的な遺伝子として体内にすりこまれているのではないだろうか。

有用性と効率の数量化をめざす現代社会にあっては、こうした無用性と非効率性の権化の如き古い歴史的空間は、不要なもの、目的なきものとして捨て去られ、

現代的なもの、即ち、カネを生むハコモノに置きかえられていく。こうした状況に歯止めをかけるためには、この地域に住み、学び、遊ぶことに生涯無類の誇りを感じる子どもが育くみが重要である。そのことは、子どもが自分の住む地域にある有機的生命体としての伝統的場所への愛情を高めることによる、広い意味でのイキモノへの畏敬のココロを育くむということに大きな意義がある。

自分の地域のタカラモノとしての歴史的文化的価値がある建築・町並みを守り育くみ、このことにかかわる子どもも大人も生きる力を高めることの両面が同時進行することを「まち育て」と呼ぼう。*1 子どもの生活・教育現場と地域のまち並みの保全・育成現場の両方を「まち育て」の視点から再編すること―ここに生命孕む柔らかい場所の喪失が急速に進む現代のまちの変容過程に、子ども参加を仕掛けることの重要な意義がある。

歓待の心にひたされた歴史的場所

そんな視点から、子ども参加のまち育てを生き生きと進めている典型的地区として、愛媛県伊予市灘町がある。伊予市の旧市街地は戦災をうけずに、まことに

美しい丹精な古い町家・町並みが残されていた。しかし、社会潮流の急速なる変動によって、街の中心部の灘町・湊町では、一九六〇年に七、三八五人の人口が二〇〇〇年は二、六二八人へと急減した。建物の老朽化と駐車場やマンションなどへの転換が進むとともに、有力な地場産業の場も消失していった。

こうした「変わりゆく町」の過程にあつて、一九九八年十一月、灘町を拓いた宮内小三郎家と町並みを保存・育成するために、「灘町・宮内邸を守る会」の活動が始まった。それは、市民向けの見学会、文化活動、専門家との共同調査、景観づくりの基本計画・条例づくりへの動きなどをおこしつつ、子ども参加のまち育ての視点から、松山建築学会、愛媛大学曲田研究室などと協働して、地元の郡中小学校の五、六年生の参加のもとに、「タンケン・ハッケン・ホットケン」の活動をしている。

筆者もこうした一連の活動の流れの中で、一度、地域の子ども・大人たちと灘町・湊町をタンケンしたことがある。その時、宮内家の主屋の建築年代が元文三年（一七三八）であり、二百六十数年にわたって長く立ち続けたものであることがわかるとともに、ひとさきわ高い屋根に

は千鳥が飛んでいるかのような千鳥破風があり、敷地内には酒造りに使われていた井戸小屋や蔵が残されており、その囲みの場所はこちよいものにつつまれるような感じがした。新旧の隠居家のうちふるいものの「外壁に使われている梅の木目、北山杉の小丸太、五郎太石にすいつく板、座敷には柱も天井板も目の込んだ赤味の柾目、床框の黒柿、軒桁に使われた赤松、戸袋の楓の一枚板など」*2、建物の内部は、まさに生命がひそんでいる有機的感触のひたされた場所であつた。

子どもたちは、そうした柔らかい場所にまるで招かれたように進みいった。歴史的空間がもつ外面的にも内面的にも何かを語りかける場所の力にふれて、子どもたちは「おはいりなさい」の歓待をうけた。子どもたちや大人たちがそこに居ることは、有機的イキモノとしての歴史的建造物と人々の間に相互呼吸する柔らかい関係を紡ぎだしていった。そのことが束の間のことではなく、持続的なもので

ありたいと、幾重にもヒダと折り目をもつその場所は無言のうちに語っているようであつた。

後日、子ども・学生たちは、その時の感動を絵マップにし、発表会を行ない、お互いの着眼点や考察力をほめあつた。*3 今後は、「タンケン・ハッケン・ホットケン」の活動を、さらに多様な表現・制作活動（例、カルタづくり、布絵づくりなど）により、学校での総合的学習との連携や商店街・地域の住民との相互交流を高めていくとよい。加えて、空き蔵や空き町家を「まち育て活動拠点」に改造し活用し、「まちの縁側」的場所に育んでいくとよい。そのような持続的活動展開によって、子どもと歴史の場所は歓待する・されるの相互敬愛の関係を育くむことになる。

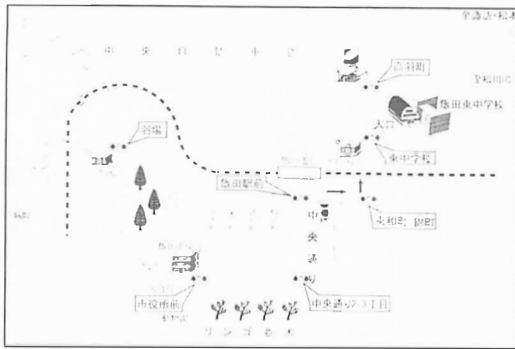
〔注〕*1延藤安弘：「まち育て」を育くむ
―対話と協働のデザイン 東京大学
出版会

*2門田眞一：住民主体の景観まちづくりを考える―環境学習と「まち育て」 ECCR No 8 二〇〇二年十一月、えひめ地域政策研究センター

*3武智和臣：ワークショップ「現代の町家Project」 松山建築学会通信「楽」



子ども達のまちタンケン
(宮内邸にて)



キラリ
光るまち

長野県飯田市

りんご並木五十年

長野県飯田市立飯田東中学校教頭

尾曾 善彦



りんご並木誕生

飯田美しき町 山近く水にのぞみ
空あかるく 風におやかなる町

(中略)

よそおいはかたちにあらず
美しく静かに ゆかしくゆたかに
おんみの心をこそ
新しくよそおいたまえ

昭和二十二年五月まで飯田に疎開して
いた岸田國士の「飯田の町に寄す」と題
した詩の一節です。旧市街地が大火に包
まれたのが同年四月でした。あの美しい
町並みと人情豊かな町への思い、大火か
らの復興を願っての賛歌として寄せられ
たものと思われます。



昭和22年4月に起きた大火の焼け跡

町をほとんど焼き尽くした大火を二度
と起こすまいと、幅広い道路を造りその
中央を防火帯にする案が町で進められて
いました。時の校長松島八郎先生は、出
張で行った札幌のポプラ並木の美しさを
全校朝会で生徒に話して聞かせました。
そして、焼け跡に街路樹が必要なこと、
ヨーロッパにあるりんご並木のことなど

を語りました。その話は生徒の心に感動
を呼び、学友会の役員が中心となって、
自分たちの手でりんご並木を作りたいと
町へ提案しました。当初、町は反対して
いましたが、「りんごの実のなる美しい
町を」「りんごの実を盗る人のいない美
しい心をもった人のいる町に」という生
徒の熱意を受け入れました。そして、昭
和二十八年十一月四十七本の樹が全校生
徒の手によって植えられ、りんご並木が
誕生しました。

苦難を乗り越え

昭和三十年六月、初めてりんごが四十
九個結実するも、盗難にあい収穫できた
のは五個でした。市民からは「心配して
いたことが現実になった」など、厳しい



新しくなった並木通り

声も寄せられましたが、新聞などで報道され、有安勇さんなど全国の方から寄せられた激励の言葉に励まされ、生徒は心を強くして作業に取り組みました。昭和四十三年には、カーブームのため駐車場が不足し、「りんご並木を削って駐車場を造れ」という声の一部市民の間から出ました。しかし、生徒はこの問題をよそに毎週土曜日の午後になると、手に手に道具を持ち学校からりんご並木まで歩いて行き黙々と手入れを続けました。いつしか、駐車場問題は解消され、りんご並木は多くの市民から愛されるようになりました。

地域と共に学ぶ

平成四年から、人が集い憩える並木に

しようとりんご並木整備事業が始まり、その構想会議に東中の生徒も参加し、平成十一年生徒の意見やアイデアを取り入れたりんご並木は装いを新たにしました。そして、二十六本十一種類のりんごの樹が育つ並木も今年、五十周年を迎えます。

四月白い花が咲き、五月小さな実がいっくつもできる頃、並木愛護週間が始まります。並木の歴史や意義を学び、自らの取り組みを振り返り、一年間の並木作業への決意を新たにします。また、専門家の指導を受け、地域の方と協力して全校で摘果作業を行います。この時期から、十一月下旬まで各クラス四、五人が並木当番になり毎日放課後、除草作業等を交代で行います。六月には、地元の農業高校と「花いっぱい交流会」を行い、並木花壇へ花の苗を植えます。花壇が並木を美しく飾る九月から十一月にかけて収穫作業を行います。収穫したりんごは、福祉施設、公共機関などに配布します。十二月、感謝の気持ちを込めて、有機堆肥を手で撒き、樹の根元に敷き藁をします。一月下旬、豊作を願って、専門家の方と共に剪定作業をします。

生徒は、これらの体験を通して、いのちの尊さや勤労・奉仕についてなど学び、並木作業ができることに感謝する心とま

ちづくりに参加している東中生としての誇りを培っていきます。まさに、地域とともに学ぶもう一つの教室といつてよいでしょう。

地域への発信を

飯田市のシンボルとなったりんご並木は、地域の財産として、市民による町づくりのシンボルとして、今まで以上に地域の方と共に守り育てていくべきものと考えています。そして、作業だけでなく、りんご並木で行う新たな活動を創造し、発信していくことがこれからの課題であると考えています。



9～11月に行われる収穫作業

引き算型まちづくりの事始め (八)

前回滋賀県豊郷町における伝統的な校舎の取り壊しにまつわる話題で引き算型まちづくりを論じ、手本になるまちづくり事例として大いに期待したが、リコールを成功させた後の選挙結果を見る限り、リコール運動を推進した住民組織が破れてしまい、元の木阿弥に期してしまった感じで、住民運動の難しさを痛感した。

ことの顛末は何も分からないので判断の仕様が分からないが、結果を知る限り残念の一語に尽きる。リコールを押し進めた住民組織の中で何が語られ、どう取り組まれたのかは知る由もない。が、あそこまで盛り上がっていたリコール成立直後の町長選挙であるような結果になると、その裏に残される要因としての何かが気になって仕方がない。

選挙の度に聞かれる言葉に雪崩現象というのがある。意味の違いはあるが、私の町にもよく聞かれる言葉に、投票に際して「死票」は投じたくないと、下馬評に耳を貸しながら、優位な候補者を判断し、投票する類の有権者は少なくない。雪崩現象などは、運動の成果とともにこんなところから生じる現象かもしれない。選挙の度に不愉快な思いをさせられる行為は少なくないが、コミュニティの形成に悪しき慣習として今も根付いているものに、有権者を組織で縛る、地域で固

めるなど、旧来型の選挙戦術は相変わらず常套手段として健在である。このことが、時には地域社会を構成する住民個々が長いものには巻かれろと、「私」という一番大切なものを他人に委ねる慣習から解放されていない現実を知り、正していく運動もまた引き算型まちづくりの環境であろう。豊郷町の住民がこんな環境の中に置かされていたとは思いたくはないが、真摯に考えた上での選択であるとするれば、よそ者が結果を見て論じても仕方がない。・・・行政への主体性を發揮する住民とは何なのか。

行政への住民参加

住民参加という言葉は、これまでに随分と使い古されてきたが、まだまだ健在である。そしてこの言葉は行政活動の推進の過程で頻繁に使われてきたし、これからも使い続けられそうである。

よくよく考えてみると、住民参加は住民主体とは異なっている。参加という以上は主体があつてあり得ることであり、住民が主体であるのであれば、住民参加を指していうべき言葉ではない。住民の行政参加であれば領ける言葉である。

これまで長年にわたつて行政が一人歩きしてきたことは否めない。とはいえ議会があり、各種の審議会や委員会が形づ

くられている以上、住民に知らしめ、検討の場を与え、協議に参加した形にはなっている。引き算型として考えたいのは、手続きなど形式が整つておればそれでよしとした職場体質に対して、矛盾を感じて欲しいし、見直したいことである。

戦後六十年にもなるのに、「行政は御上である」と思っている住民が未だかつていることも事実である。悲しいことではあるがその証拠に、何か制度の改悪等当事者にとつて不利益なことが実施されたときなど、「御上のやることだから仕方がない」という言葉が返つてくる。行政と住民の間に情報の交換がなく、真のコミュニケーションが形づぐられていない結果であろう。

北海道ニセコ町が制定した「ニセコ町まちづくり基本条例」(平成十二年十二月二十七日条例四十五号)は、十四章四十五条からなつており、各条毎に情報の開示と町民の参加が明記されている。さらにその前文に、『まちづくりは、町民一人ひとりが自ら考え、行動することによる「自治」が基本です。私たち町民は「情報共有」の実践により、この自治が実現できることを学びました。』(中略)とある。町長をトップにした行政側も、四千五百余人の町民も「まちづくり」を

合い言葉に、住民自治の確立に邁進している。参考までにその一条を紹介しよう。

(条例制定等の手続き) 第四十二条 町は、まちづくりに関する重要な条例を制定し、又は改廃しようとするときは、次のいずれかに該当する場合を除き、町民の参加を図り、又は町民に意見を求めなければならない。

(一) 関係法令及び条例等の制定改廃に基づくもので、その条例の制定改廃に政策的な判断を必要としな

い場合
(二) 用語の変更等簡易な改正でその条例に規定する事項の内容に実質的な変更を伴わない場合

(三) 前二号の規定に準じて条例の制定改廃の議案を提出する者(以下「提案者」という。)が不要と認められた場合

このような条文を読み、我が町に当てはめて考えてみると、議会議員がどんな反応を示すのか、選挙で選ばれた町民の代表としての存在が曖昧になり、引いては議会軽視として反乱が起きそうであるが、ここにも提案する側からのアカウンタビリティがしっかりしている証が窺える。羨ましいというよりは、見習わなければならないことである。

さて、住民が主体的に行政に参画できる場づくりはことのほか重要であるが、二セコ町のようにはいかない。引き算型まちづくりを形づくる上で、行政事務への町民の参加の在り方についての見直しは必要不可欠であるが、その取り組みは容易ではない。

例えば市町村には、多様な条例の中にそれぞれ審議会等の設置が規定されている。法的に設置を義務づけられる性格のものから、任意に設置されるものまで相当の数に上る。都市計画審議会、公民館運営審議会、特別職報酬等審議会など、数えれば五つや六つの審議会が存在する。

審議会そのものの存在について否定するものではないが、その設置目的や効果に対して疑念を抱きたい事例は少なくないであろう。審議会とは、「行政機関に付置され、特定の事項につき審査し評議する、合議制の機関。」(日本国語大辞典・小学館)とあるが、真意のほどはよくわからない。

私が町役場で行政事務に携わった拙い経験で知った審議会とは、質的には名前ばかりであり、個々の行政計画等に関して「審査し、評議する合議制の機関」とはほど遠い感じがしてならない。構成メンバーの選任は、法律、条例等で特定されるものを除いては、行政事務を所管する担当課若しくは担当者に選任の権限が

与えられるが、その基準は実に曖昧である。特に町村など小規模な自治体の場合、専門的な知識を求められる審議会委員に適する人材は皆無に近い。多くの場合は公的な肩書きを拠り所にして選任されることが多い。また任意に選任される場合は、行政に都合のいい人材が登用されることで、住民参加の建前が整えられる。いわゆる行政計画の追認機関として機能する。事業の善し悪しを審議する機関にはほど遠い人選になる事例は少なくない。

よく専門的な知識を持つ研究者等を委員に選任しようとする場合、なぜか交通費や宿泊費、委員報酬などの負担がネットワークになってご破算になってしまふ。ここにも本音よりも建て前としての審議会や委員会が優先してしまふとなると、まちづくりにはほど遠い行政体質といわなければならない。

進んだまちづくり型の自治体を見ると、これら専門的な人脈としてのネットワークが確立しており、常に客観的にまちづくりを評価する仕組みができてきていることを知り、改革を図りたいものである。

内子町 岡田 文淑

私は、新居浜市で生まれ育ちました。大学時代を除いて十九年、新居浜で過ごしています。

大学卒業後、新居浜市内にあるケーブルテレビ局に就職し、学生時代とは違った視点でこの町を見るようになりました。

今の会社で働いていて、よかったなあと思うことは、新居浜には、私と同じように新居浜を愛する人がたくさんいることを発見できたことです。

その上、その人たちはこの町を愛する気持ちを形にしようと頑張っています。

新居浜には、「昭和通り」という商店街がありますが、今はお店を畳んでいる所も多く、お世辞にも賑わっているとは言えません。

しかし、昔ながらの伝統や技術を守って営業を続けているお店もあります。

新居浜市商工会議所では、商店街の中にあるこういったお店の知られざる魅力を引き出そうと、一般の人が、その店主さんに、簡単な講習のようなものを行ってもらったり、実際に伝統技術を見せてもらったりできるような場を作る試みを始めています。

また、太鼓祭りが有名な新居浜には、太鼓祭りを和太鼓で表現している「勇太鼓」というものがあります。

その「勇太鼓」を若い人たちに受け継ごうと、「勇太鼓保存会」が和太鼓教室を開き、指導を行っています。

その他には、市内にある巨木百本を「わ

思いを形にする



新居浜市
株式会社
ハートネットワーク
水田ひとみ

がまち名木百選」とし、市民に新居浜に残る自然を知ってもらい、共に大事にしていこうと、巨木百本の写真や説明などの展示をしたりする人たちもいます。

思いを行動にすることは、とてもエネルギーのいることで、ましてやそれを他人に伝えるとなると、様々な苦労がある

と思います。

それでも、活動を続けているのは本当に新居浜が好きだからなんだろうね。

私は毎日の仕事でこんな素敵な人たちに会えることができ、本当に嬉しいです。

私にできることは、今の仕事を通じて、このような素敵な人々や新居浜の魅力を広く市民に知ってもらうことだと思っています。

私も、みんなに続いて、新居浜を好きな気持ちを形にしていきたいと思っています。



昭和通り商店街の梶田屋商店さんで雪駄の鼻緒を立てるところを見せていただきました。

市町村合併により行政の枠組みや呼称が変わることは、想像以上に地域に影響を及ぼすものであります。地名にはその音や意味に様々な地域の歴史や文化が刻まれているからです。私の実家は長崎県の島原市という所にあります。住所は「南千本木町」。その名の通り山の麓のこの町には多くの木々があります。そこはいわゆる開拓地で、祖父の代に切り拓いていった所でした。小字を「開拓」といいました。たかだが五十年ほど前の話です。この名前が意味のないものに置き換えられたとら、亡き祖父の悲しみは計り知れないものと思います。

今新しく生まれるまちの名前に対する異論が続出しています。それは新しい名前に歴史性や文化、地域を感じられないからに他なりません。また漢字から仮名標記にした名称にも反論が多いようです。こちらはわかりやすさの名の下に漢字という文化をないがしろにしているからでしょう。これほどまでに物議を醸し出すのは決定の方法がおかしいのも原因のひとつです。一見民主的であるかのような方法で決定されているようですが、本当に民主的であるならばこれほどの反論が出るはずがありません。地名は文化財だ

という人が多くいます。漢字もまた然りです。今回のような動きの中で地名（文化財）が失われるのならば、松山城や宇和の開明学校、先日国の重要文化財に指定された新居浜の広瀬邸だって、民主主義の名の下に破壊してもいいという理屈になってしまいます。

遺跡の発掘調査では、一片の土器が地

歴史文化を まもり伝えるという 仕事の社会的意義



宇和町
教育委員会

高木 邦宏

えられない地域固有の財産です。そしてそれをどう伝えていくかということにも私たちは知恵を絞らなければなりません。今や単にもはや形だけを残す今までの博物館的な考えにとどまっていはいけません。周囲の環境も含めてまもり伝えていくべき時代です。ここでいう環境とは自然的環境だけでなく、そこに住む人間や景観などの人文的環境もひっそるめたものです（そういう意味では地名も大事な環境なのですが）。ガラスケースの中だけでは見えない、本来あった環境の中でしか得られないものは多いはずなのです。

文化や歴史をまもるとはどういう社会的意義があるのか。こういう時代だからこそ、ゆつくりと真剣に考えてみる必要があると思います。そんなわたしたちにとって、温故知新という言葉は示唆的です。確固たる理念と方法をもって地域の歴史や文化という固有の財産を引き出し豊かに物語る、わたしたちの仕事にはそんな意義と喜びがあります。

域の歴史解明に重要な意味を持つ場合があります。物言わぬ語り部から話を引き出すのが私たちの仕事ですが、そこには様々な考え方や手続きが必要になります。平たくいうと理念と方法です。理念と方法に裏付けられた資料は、教科書以上に地域の歴史を雄弁に語ります。これは決してお金で買えない、よそのものとは換

ひめ 媛のかわら版

あかがね(銅)の里から (その1)

新居浜市 社団法人 新居浜市観光協会

理事・事務局長 前原 和子

松野町のキャンペーンおばさん(お姉さん!?)の毎回の文章を楽しみに「舞たうん」を読ませていただいております。なんと担当者さまからの白羽の矢がこの私にくっつきりと刺さってしまいました。

隅田さんのパワーにはいつも触発されてばかりなのですが、南予の元気パワーの次は、東予のごちゃ混ぜパワーをご紹介しますのも味が変わってよろしかろうとペンならぬキーを叩くことにあいなりました。さてさて如何なりますことやら。

変化する新居浜

私の場合は、新居浜で生まれて十一年で父の転勤が決まり、以後何回か転勤を繰り返して、新居浜に戻ってから十八年間という月日が流れています。その間、いろいろな方とめぐり合い、「まちづくり活動」に関わりだしてからもすでに十年余りの年月が流れております。

思い返せば、特に「まちづくり」という意識を持って行動してきた訳ではなく、振り返ると足跡と道が出来ているようだというのが正しい表現だと思います。

もともと人間好きの性格故か、本当に素晴らしい先輩や仲間に恵まれました。新居浜が元気なまちであってほしいとか、



新居浜太鼓祭り (10月16~18日)

住んでよかつたと言えるまちにしようとか、お互いにいい生き方ができたらいいねとか。それが絆になったのではないかと思います。その舞台としては、新居浜は非常に変化に富んだステージを提供してくれます。

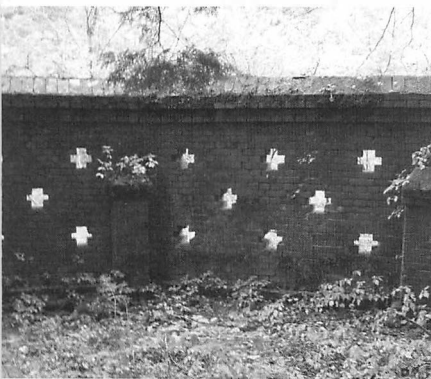
今ホットな新居浜の情報といえば、まず愛媛県で初めての合併というニュースになるとありますが、愛媛県で二番目に大きな街と、西日本一小さな村がこの四月一日に合併しました。別子山村は新居浜市にとっては、生みの親とも言える村であり、歴史的つながりでのこの合併が最良の選択だったと言える「新しい新居浜づくり」を、行政も市民も一体となって進めていきたいものです。

新居浜の魅力発信

さて、魅力度大幅アップの新居浜市ですが、これからの知恵の出どころ。いろいろな動きが始まっているようです。

合併を記念したイベントはもちろんのこと、新居浜の魅力発信する市民ポータルサイトを立ち上げようとしていたり、昨年、国土交通省の事業として立ち上がり、本年度は新居浜市及び(社)新居浜市観光協会の事業として継続が予定されている「新居浜コンシェルジュ」というネットの中での新居浜のご案内、さらに(社)新居浜市観光協会のホームページも運営開始を予定しております。観光面での施策も新規・継続も含めてパワーアップしているようです。

と、ここまでキーを打って、私の現職をご紹介していないことに気がつきました。大変失礼致しました。実は、(社)新居



旧別子・接待館跡の煉瓦塀

浜市観光協会の事務局長に就任して今年で四年目に入ったところ（理事兼任では三年目）で、観光振興の奥深さにあの手この手と攻めてはありますが、まだまだ試行錯誤の真つ最中、未だ出口の見えない状況にあります。

新居浜の観光と言えば、勇壮華麗な太鼓祭り、産業遺産としての別子銅山にまつわる遺跡や建造物群などが中心となり、さらに海から別子山の大自然のロケーションも季節の変化を添えて、ダイナミックに展開されます。

今年には特に、マスメディアへの登場回数の影響もあって、早春から花を追いかける方々が後を絶たず、開花状況のお問い合わせが数多く寄せられました。

桜に始まり、クマガイ草、アケボノツツジ、ツガザクラ、アカモノ、アヤメ、シヨウブ、シヤクヤク、アジサイ等々、俄かに植物学者を気取れるほどの状況でした。確かに標高差を切り口とするならば、桜も一ヶ月間咲き続けていることになり、ますし、大自然を背景にすると山野草の存在感がぐっと増します。

これらの魅力を外側に向かって広く発信する仕組みと、内側においては、おもてなしのメニューをたくさんご用意する必要があります。さらに、交通手段や

宿泊等の情報も不可欠です。

人と人とのふれあいを大切に

それと私が大切にしたいのは、やはり人と人とのふれあいです。どこへ行ってきたかではなく、そこで何をしてきたかとか、どんな人であったかというようなことが、人の記憶に長く残る思い出となると思います。そして、また会いたいなと思える人が多く住むまちが新居浜であってほしいと思います。

お蔭様で、人と出会うのが仕事のような職場ですので、新居浜には元氣人がたくさんいらつしやるのがライブでわかります。さらに、ボランティア団体の事務局も持たせていただいておりますので、みなさんのパワーに圧倒されっぱなしの毎日です。

また、協会の事業として年間のイベントも多いのですが、ここでも素敵な新居浜人にめぐり合うことが出来て、嬉しくて嬉しくて、しつぽンプンの状態です。この新居浜人の魅力を今回のご依頼を活用させていただいて、少しご紹介できればというところで、残念ながら次回です。せっかくキーを打つ音もリズムに乗って来たのですが、乞うご期待ということに致します。



“MY TOWN”らおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第24弾

近代化遺産シリーズ

戦時遺産について



岡崎 直司

近代化遺産の中には、土木、産業、建築の分野の他に、戦時系の遺産がある。二十世紀は戦争の世紀だったとも言われる。県内で、それらのいくつかを拾ってみよう。

写真①は、江戸末期の砲台跡。元々、日本の近代は、国防意識の目覚めから始まったと言っても過言ではない。幕末期（嘉永六年・一八五三）にペリーが浦賀へやってきて、外国に対する関心が過剰なまでに高まる。愛媛、いや伊予の場合、それ以前に宇和島藩などでは、高野長英により久良砲台（現・城辺町）がすでに築かれていた。同三年（一八五〇）のことだった。

以後、安政二年（一八五五）には、同藩により樺崎砲台（写真②）が設置される。設計は村田蔵六（後の大村益次郎）とされ、宇和島湾口を臨み、洋式工法により大砲が五門置かれた。同年、今治の桜井海岸にも松山藩の手でお台場が築かれ、今もかろうじてその土盛りが残っている。外国の脅威に備え、全国各地でそのような施設が築造されていく、それが幕末という時代であった。

やがて戊辰の役を経て、大政奉還により明治となり、西南戦争、日清・日露戦争、第一次世界大戦など、近代国家としていくつもの戦争経験の後に、時代はあ



ひさよし 久良砲台・台場下の石塁▶



◀復元整備された樺崎砲台

の太平洋戦争に突入する。

写真③は、戦時迷彩。当時、全国各地でもっぱらに見られたもの。米軍機による空襲に際し、白壁は目立つので出来るだけ黒く塗ることが、当局より通達される。かくして日本中の白壁という白壁は全て墨色に迷彩された。県庁本館や松山測候所（現松山地方気象台・持田町）な

ども塗られたらしい。しかし、この倉は八幡浜市千丈地区の山の斜面、郷という集落にあり、松山市のような「お町」ではない。モチロン空襲などなかったのだが、周囲がみな塗って、一戸だけ塗らないわけにもいかない。非国民扱いされかねない時代風潮なのだ。今となっては、アートの壁に見えるくらい、縦横無尽に塗つてある。

写真④も、そうした防災意識が暮らしの中で普通の感覚としてあった時代の証明。西条市氷見で見つけた「防空用水」。防火ではなく防空。

それから、先ごろ同市禎瑞地区で、トンでもないものを発見した。いや、正確には地元の郷土史家三木秋男先生から教わった。それが写真⑤のナント「奉安殿」！、旧禎瑞小学校から移設されたものだった。・・・と言つても、若い世代にはピンとこないハズ。戦前期には、日本中の学校に設置されたもので、中には「御真影」と「教育勅語謄本」、あるいは国旗などが納められてあった。ゴシンエイとは、いやしくもかしくも天皇皇后両陛下のお写真のこと。それらは、何か

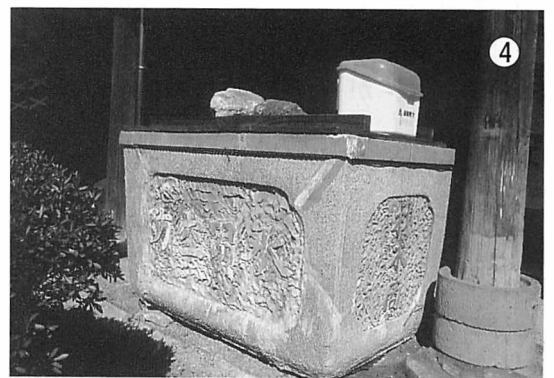
の式典には必ず白い手袋をはめた校長先生の手によってうやうやしく会場に運ばれ、みな最敬礼で迎えた。従つて生徒は、普段でもこの奉安殿の前を通るとき、やはり最敬礼しなければならぬ。

戦後、マツカーサーがコーンパイプをくわえて厚木飛行場に降り立った時点から、米軍GHQによる日本統治が始まるが、彼がまずやったことは、軍需施設の徹底破壊とこの奉安殿の撤去だった。軍国主義教育の象徴とみなされ、それはそういう事情で瞬く間に日本の中から消えた・・・ハズだった。

しかし、ここにこうしてナマ奉安殿が存在している。これがアノ、話には聞いていた奉安殿なのか！私はチト興奮してしまった。無いはずのものがここにある。



⑤



④

西条市内には、まだ調査中だが五基の同様のものが残っていることも分かってきた。ウーン、しばらく西条から目が離せなくなりそうだ。インターネットで調べると、国内では沖縄や平塚市、水沢市などにも存在するが、愛媛県内では初報告例。

昭和二十年に敗戦を迎え、あれから五十八年。戦後生まれでさえ還暦が近いほどの年月が過ぎ去った今、そうした戦時遺産の記録は、時間的に聞き取り調査のギリギリの段階に差し掛かっている。情報をお持ちの方はお知らせ願いたい。

〒七九九一三二二

伊予市上吾川二二一五 岡崎マデ

E-mail:mokazaki@dokidoki.ne.jp

まちづくり考

「境界領域」を考える

「境界領域」という空間

現在も活躍されている地域づくり活動家の方々によって一九九五年十一月まで四〇号にわたって発行された地域文化誌『ジ・アース』に「境界領域」という言葉がたびたび登場します。最終号が発行されたのは既に八年前になりますが、経済状況に多くの課題があり、社会全体に閉塞感が広がり、グローバル化の大きな潮流の中で地域が改めて注目されつつある現在、この「境界領域」はあらためて考えてみる価値を持つ言葉であろうと思います。

「境界」という概念はとても厳格な響きを持っていて、互いに接する異なる主体の間に明らかな線が引かれていて、両者が対立的な関係にあるという印象を受けます。しかし、ここに「領域」という言葉をつけて広がりを持たせると、対立的な印象が薄れ、空間のイメージが変化



(財)えひめ地域政策研究センター

統括部長 脇 安生

します。そこでは両者を分ける境界線が曖昧になり、相互が影響しあう場が準備され、それによって新しいものが生まれやすく、多様性に富む空間になります。

自然の中にもそのような空間の例を見ることが出来ます。例えば、川の岸辺や海の波打ち際です。水と土の接するところ、川の流れに接し、あるいは波に洗われていてこれらの空間は水の動きの微妙な変化を受け、驚くほど多様性のある生命活動が生まれる場所となっています。このような事は人工的に垂直に立てられたコンクリート護岸のところでは見る事ができないものです。自然にある生命体は周辺の環境に適応すべく、生存のために進化し続けていますが、これらの空間は正にそのような生命現象の宝庫で、自然環境の維持という点でも極めて重要な場所だと考えられています。

地域社会が持つ「境界領域」

地域という人間の生活空間においても同じようなことを考えることができると思います。地域の中から見て外の地域との交流が行われる空間というようなイメージでしょうか。もちろん物理的な空間が必要だということではなく、観念的なものでもいいのですが、このような空間では地域の素材が地域外の異なる環境からの刺激によって変化し、あるいは外から入ってくる素材が地域内の環境によって新たなものに変容するという創生のプロセスが行われることとなります。

ただ、他の地域、外の人々との接点があるというだけではこのような「境界領域」が自動的に生み出されるということにはなりません。そこには幾つかの要件が必要になると思います。まず、そこへの参加者が地域への問題意識、課題への気付きを持っていることです。同じように新聞記事を見ている興味のない話題は記憶に残らないように、問題意識を持

っていないければ的確な情報に触れることは難しくなります。二つ目は客観的な観察、角度を変えて見るという視点のずらしができるということです。周りの情報に対する謙虚さがなく独善的になつていては、仮に有益な情報に接していても適切な判断ができなくなります。そして、コミュニケーションを行うための言葉の能力も大切です。地域の言葉だけでなく「境界領域」において使われる言葉を理解できなければなりません。情報を正しく認識し、吸収し、そして地域内に伝えていく力も必要になります。

変化への適応における「境界領域」

現在の情報技術の進展、ネットワークの拡大、人・物の流動性の高まりはそれぞれの地域の「境界」を取り払う方向で動いているように見えます。そして経済社会における効率性の追求と個人レベルでの価値観の多様化はこれまで地域が持っていた個性を希薄なものにし、他の地域との均質化、同一化させようとしています。しかし、個性ある地域が失われていくことが望ましい方向とは思えません。社会の豊かさはそれぞれの地域がその独自性を維持しながら外の環境変化に適応していくことで生まれます。そこで

は外の地域から孤立するのではなく、とって外との地域と同一化するのではない対応が求められます。独自性の確保が孤立にならないように、そして環境への適応が均一化にならないように、その間で上手く舵取りをしなければなりません。

これは完全に組織化・秩序化された安定的な状態でもなく、といってカオスのような混乱した状態でもないという「境界領域」と言えるようなもので、ちょうど熱力学の理論から生まれた「カオスの縁」という概念のアナロジーで考えられるように思えます。「カオスの縁」では多様性が生まれ、小さな動きを核にして、新たなものが「創発」され、自己組織化がおこつてくるとされています。社会における不確定要素が増加し、社会全体の不安定感が高まってくると、小さな波動が大きくなりに結びつく可能性がります。現在のような社会状況では、一人一人の動きのその地域に与える影響がこれまで以上に大きくなってくると思えます。小さな動きの積み重ねがどこかの時点で、地域を大きく変化させることになるということなのです。

「境界領域」における観点

進化というのは、それに参加している

プレイヤーたちが、全速力で自らを変化させている過程なのだ、という説があります。環境に適応しつつ変化していくことは生存のために必須のプロセスです。ある状態に止まっていることは生存不適合者になることです。しかし、かといってただ流れのままにむやみに変化するというのでは混乱につながります。

環境変化に適応できない地域は停滞します。自分の地域のみを見ていて外を見なければ、地域に遺る伝統を守るという意味では良いように見えますが、いずれ担い手がいなくなり、結局地域間の比較のなかで淘汰されていくことになる可能性が高くなります。しかし、逆に外の環境ばかり気にしてそれに同調することばかり考えていたのでは、地域の独自性は失われ、地域の魅力は薄れていきます。外へ指向した繋がりを持つているか、その繋がりがから生まれる影響を地域に引き込むことができているかということに加え、地域にある既存の風土、文化、産業等の独自性を十分に意識しながらその変化をどう受け止めていくかということが鍵になります。「何を遺し、何を伝えていくか」を常に考えていくこと。これはこの「境界領域」における重要な観点の一つだと考えます。

地元の課題・自分の課題

前研究員 内海村 池田 大作

難題！

一年で、センターを卒業?! 卒論を書かせてもらえるということは非常に光栄なこと?とは思っている。でもな〜正直一年は短い。とりあえず、感じたこと、これからの目標などを綴ることにしようと思う。

今、自分は何ができる?..

平成十四年四月から一年間、人生で最も意義深く、おそらく二度と経験することができない一年間を送ったのではないかと思う。

自分がいかに地元のことを知らないでいたかということ、人との出会いが何物にも代えられないほど貴重で大切だと感じたこと、物事の本質を見る目を養うことができたということ、挙げればきりが無い。

地域づくりという広大な分野へ一歩足を踏み入れた訳であるが、まだまだ未知の領域だらけである。これからの自分なりの目標は、地域の若者の代表として見聞を広めること、いろいろな意見を集約し反映させること。早急に手を付けないといけないのは、みんなの意見が出

るような場所づくり! 一人一人が関心を持つようしかなければならないし、一人一人が地域に根ざしているということ

を自覚してもらわなければならない。時間は流れ、いよいよ市町村合併へ突入していく。つくづく思っていることは、合併について協議する場に何故、若者がいないのかということである。一部のお偉いさんが話し合っただんどん進んでいく。いまだに不思議でならない。合併後、地域を担う若者の意見がまるで反映されていないのではないだろうか? 逆に、若者にも問いたい。これからの地域を担うのは自分たちだとわかっているのか? 他人事と思っていないか? 人の意見に流されすぎではないか? 今一度、考えて欲しい。

損得・・・

寂しいかな、長期に亘る不景気で、地域づくりは停滞していると思う。というより先程も述べたが、何ごとにも無関心な風潮が強い。自分だけ良ければ全てよしと思う人が多いのではないだろうか。地域を良くしようとするなら、まず損得勘定という考えを消去しよう!

些細なことからはじめよう!

自分も含めてであるが、少し振り返ってみよう。当たり前前にしていたことが当たり前前にできていないのではないだろうか。例を挙げてみよう。

身近なことできてないのが「あいさつ」じゃないだろうか？不思議なことに年を取るほどあいさつしなくなる。特に都会では、あまり目にする事がない。一番簡単にコミュニケーションを取れる方法なんだけど。誰しも小さい頃は元氣よくあいさつしていたはず。些細なことである。

誰でも出来る地域づくりの第一歩！お互いを知っていく一つの手段である。

最後に

昨年手がけたセンター発行の本「えひめの地域づくり人 一〇〇人」で私が取材を担当し、発行前に亡くなられ、掲載できなかった方がいる。その方の地域づくりに対する思いを綴る。

平成十四年十二月某日。えひめ地域づくり研究会代表運営委員でもあった、建築家の青木光利氏取材した。約一時間、地域づくりに対する思いや、これからの地域づくりについて語っていただいた。

① 十五パーセント

いつの時代でも、百パーセントの人で地域づくりはできていない。十五パーセントの人が志を持つていけば何とかなる。地域づくりの第一歩は自分と違う性格を持った友達を二人つくることからである。

まちづくりで成功しているところは、個性の違う人が三人以上集まっている。一人でグイグイ引っ張っている地域もあるかもしれないが、その人の意見に染まりやすい。また、世代を超えて取り組むことができる。

② 小さい方が・・・

小さいグループの方が何かと動きやすく活動も活発になりやすい。どんどん地域に向いて地域から学ぶことが大事である。

③ 悩み

次世代にバトンパスするためにつかきを作っているのだが・・・後継者がいないのが現状ではないだろうか。まだまだリーダーの力不足。現状を維持することが全てではないのでは？組織づくりも少しずつでもいいから変えながら進めたいこう。

青木さんは、とても優しい目で語ってくれた。

所信表明

いろいろな方と出会い、たくさんの方とを学んだ。これから、実践に入らなければならぬ。センターにいた頃以上に、どんどんいろんな地域に赴きたくさんのことを吸収し、地元の地域づくりに活かしていきたい。

※

※

昨年一年間、お会いした方々、お世話になりました。改めて、これからもご迷惑をおかけすることがありますが、よろしくお願いいたします。



内海村 須ノ川公園

石畳地元学に

参加して

研究員 梅村 裕治

四月から当センターに派遣され地域づくり活動部門の一員となり、期待と不安の中、もう三か月が過ぎました。新しい環境の中、自分が何をしたいのか、何ができるのか、手探りで目標を探しています。まずは地域に出かけていきますので、ご指導お願いします。

地元について

自分が生まれ育った地元とはどんな所だろうか。海があり、その直ぐ背後には急峻な山が迫り、その合間の少ない平地に道路と民家そして限られた田畑と小さな谷川がある。ただ「それだけ」と考えていた訳ではないが、地元への関心が薄かったことに気づく。これでは地元を誇りに思える訳が無い。でも地元という視点を持たず見過ごしてしまう人も結構いるのではないだろうか。しかし、地域づくりに取り組む人達は地元への意識がまるで違う。地域づくりに参加する上で地域（地元）を知ることがとても大切なことを、センターに来て感じるようになって

た。それを特に感じたのは、内子町石畳地区で行われている地元学に参加してからである。

内子石畳地区

石畳地区は、内子町城廻から県道内子・双海線を車で少し走ったところにある。ここでは、昭和六十二年に自分達の生まれ育った地域に思いを寄せる人達で「石畳を思う会」が結成され地域づくりが始まっている。地域の歴史・景観・文化を守りながら地域づくりが進められ、農村の象徴であった水車小屋の復活や古い農家の造りをそのまま生かした「石畳の宿」など大変好評であり、「村並み保存」の代表的な地域として知られている。ここで昨年から取り組まれているのが、地元学である。

地元学に参加して

地域づくりをする上で最も重要なことは地域を知っていることであり、「ないものねだり」をするのではなく、「あるものを活かす」ことを地域のみんなでみつめ直し、さらにより地域にするための地元学。早速班分けをして、あるもの探しに出かけた。

ある農家にお邪魔して、庭に咲いている花や野菜、手作りのほうきや腰掛、倉庫の軒下で見つけた鬼瓦、風圧で選別す

る脱穀機、そして昭和初期に当時のお庄屋から譲り受けたという漆塗りのお碗や大皿などを見せて頂いた。その一つ一つに地域の文化や習慣があり、なくなりつつあるものへの思い出や懐かしさがあり、ここにしかないものを見つめることができた。その素材をもとに絵地図や資源カードを作り共有できる情報をまとめた。

※

※

地元をみんなで調べ探し整理することで、地元にはかない自然・歴史・文化・生活を再発見でき、何を守り伝え残していくのか、課題も見えてくるのではないだろうか。誇れる地元に暮らすために、まず自分の足元に何があるか、みんなで見つめる「あるもの探し」に出かけてみませんか。新しい地元に出会えるはず。



私の班で調べまとめた絵地図

「自然」を活かした

地域づくり

〜三重県宮川村〜

研究員 橋岡 勝一

先日、当センターの研修会に遠く三重県から何度も来ていただいている三重県自治会館組合の杉谷知也さんといっしょに、三重県宮川村に伺いました。

宮川村は、日本で一番雨が多い地域で、原生林が多く残っている大台ヶ原の自然に恵まれた、三重県の中西部、奈良県との県境にある人口約四千人の村です。村の総面積約三万haのうち九十六%が森林で、主な産業は林業と建設業。村に流れる宮川は平成三年と十二年に全国一級河川の水質調査で一位になりました。

宮川村では、その「森林」や「自然の水」という地域資源を活かした地域づくりが、行政や民間、NPOなどによってしっかりとされています。

水は山の特産品

ナチュラルウォーター「森の番人」

平成三年に日本一きれいな川に選ばれたことをきっかけに、村の若者たちで「森と水を守る会 フォレストキーパーズ」

を結成。有限会社を設立し、「水は山の特産品である」と考えて、平成六年「ナチュラルウォーター 森の番人」を販売しました。東京を中心とした宅配とイベントなどの行事販売で、年間六千万円の売り上げをあげています。

取締役の保田さんは「販売時に村の情報を流すことで、お客さんも村に来てくれるようになったし、自分たちも村を見つめ直すことができました」と、地域の特産品は商品としてだけでなく地域もPRするものである必要性を話されました。(有)森と水を守る会では、村の自然に敬礼をしなければと売り上げの一部で合併浄化槽をつくったり、現在は海岸の都市部の人と河川清掃や植林、海岸清掃をして交流も図られています。

自然体験で環境教育

大杉谷自然学校

大杉谷自然学校は、平成十三年に自然体験型環境教育による人づくり、交流を目的に設立されたNPO組織で、子供向けの自然体験活動や大人向けの登山・ハイキングを通じた体験ツアー、地域の教育力・コミュニティづくりなどを行っています。昨年度は六十八本の事業で延べ二千八十五人の参加者数でした。特徴のある事業として、月一回実施さ

れている「孫さんキャンプ」があります。十〜二十名の都会の子供たちが二泊三日で田舎のおじいさん、おばあさんと魚釣りや薪風呂に入ったりと田舎体験をされています。宿泊は民泊で、子供四人とスタッフ一人で泊まる形で、二十軒ほど受け入れてもらえる家があるそうです。スタッフは名古屋や大阪の大学生。

「これから、自然は残るかもしれないけど、田舎の人の考え方、生活は消滅してしまうのでは。環境教育を通して、世代交代の場をつくり、田舎の生活の伝承、生きる力の育成、新しい価値観の提案をしていきたい」との事務局の保田さんの話に、伝えていくことの大切さを痛感しました。

※

※

このほかに、森林の維持管理のために設立され、地元やUターン・Iターンの若者の雇用のもととなっている第三セクターの(株)フォレストファイターズや、宿泊施設や体験施設を持つ奥伊勢フォレストピア、村内の四つの旧小学校区のすべてに設置された高齢者デイサービス・村役場の支所・図書館等がある地域総合センターなど、いろいろな地域づくりをされています。宮川村に伺って、これから求められる自立した地域を感じました。

道の駅

「風早の郷 風和里」

北条市

いつきなだ

齋灘からのやさしい潮風が心地いい、憩いのオアシス道の駅「風早の郷 風和里」が、今年3月北条市スポーツセンターのすぐそばにオープンしました。

木造の駅舎には、道路情報や地元観光イベントの案内掲示板やお菓子等の特産品販売コーナー、地元の食材を生かした食事を提供するレストランがあります。となりには特産品販売所があり、特に目の前の齋灘でその日に獲れた新鮮な魚が大人気！地元産の野菜や果物、いりこ・豆腐等の加工品も好評です。

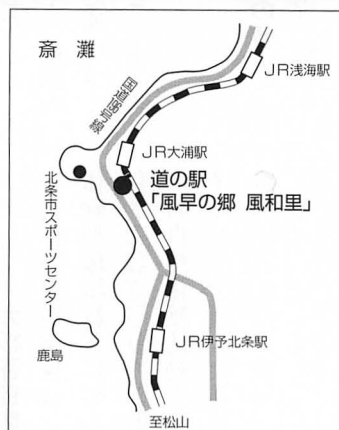
そして、後ろの高台にある展望広場からは鹿島や忽那諸島が一望でき、さわやか気分が味わえます。

ぜひ、お立ち寄りください！

《営業時間》 午前9時～午後6時（冬季は午後5時まで）

《休業日》 なし（年中無休）

《問い合わせ》 道の駅「風早の郷 風和里」 TEL 089-911-7700



● 笑う町には福来たる

兵庫・加美町 みんなが主役のまちづくり

亀地 宏著 神戸新聞総合出版センター 1,300円(税別)

コウゾ全戸1株運動で和紙の代名詞「杉原紙」をよみがえらせ、岩座神地区では棚田オーナー制度、箸荷地区では村芝居を復活させるなど集落ごとに特色あるまちづくりを展開している兵庫県加美町。町の総合計画策定のコンサルタントに、吉本興業を起用したりもしている。

フリージャーナリストの亀地宏氏が、そのユニークな活動を「杉原紙の章」、「加美ふるさと塾の章」など9章に分けて紹介。それぞれのテーマごとに出発点から現状まで詳細に書かれている。

住民一人ひとりが自立し、地域を考え、行動している加美町のまちづくりの秘訣がこの本で読み取れる。



Information センターからのお知らせ

あなたたちのまちづくり活動をアシストします

「まちづくり活動アシスト事業」申し込み受付中

自分達が活動している中で、実践者から話を聞きたい
集会やシンポジウムを開催したい

けど、ノウハウや資金がなくて…と悩んでおられるあなた！

まちづくり活動アシスト事業 があります

一度センターにお問い合わせください。

問い合わせ・申し込み先

財団法人えひめ地域政策研究センター

〒790-0003 松山市三番町四丁目10-1 愛媛県三番町ビル2階

TEL 089-932-7750 FAX 089-932-7760

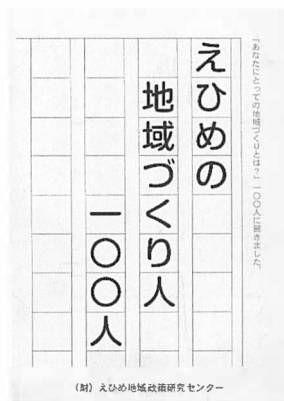
E-mail info@ecpr.or.jp

☆センターからの発行物

『えひめの地域づくりグループハンドブック』、『全国地域づくり先進地データブック』に引き続き、地域づくり活動を実践されているみなさんに少しでもお役に立てればと作りました。ご希望の方は、送料実費にておわけします。

●『えひめの地域づくり人 100人』

「地域づくりは人づくり」とよく言われますが、今回は「人」にスポットを当てて『えひめの地域づくり人 100人』を作成。愛媛県内の地域づくり活動者のネットワークである「えひめ地域づくり研究会議」の運営委員の方々など関係機関のご推薦を受けながら人選し、取材にご協力いただいた「地域づくり人100人」を掲載。巻末に「地域づくり・NPO・ボランティア団体代表者一覧」を収録。B5版



BOOK INFORMATION

●〈地域人〉とまちづくり

中沢孝夫著 講談社現代新書 700円(税別)

まちづくり、地域活性化論の決定版！

いま、全国各地で個人によるまちづくりが同時発生的に始まっている。なぜ行政主導の地域活性化は失敗し、彼らは成功しているのか。その秘密をさぐる。

「個人が主導するまちの活性化」

「多くの知恵を集める—アメリカの地域再生」

「地域を舞台にまちおこし—『北の屋台』の物語」

「まちづくりが人も育てる—『黒壁』のやったこと」

「都市の景観とまちづくり」など8章に分けて掲載。



お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)

市町村振興 (サマージャンボ) 宝くじが1枚300円で発売されます。

『今年のサマージャンボ宝くじは、1等・前後賞合わせて3億円！
2等だって1億円！』

1等 2億円×42本 前後賞各 5,000万円 2等 1億円×168本

2003年 市町村振興宝くじ

7/14日発売

発売期間：7/14日～8/1日

抽選日：8/12日



©川内康雄・室弘全画

1等・前後賞
合わせて

当たるのは
誰でもしょう♡

サマージャンボ 3億円

1等 2億円 / 1等前後賞 各5千万円 / 2等 1億円

この宝くじの収益金は市町村の明るく住みよい街づくりに使われます。 財団法人全国市町村振興協会 / 全国市長会 / 全国町村会 / 全国市議会議員会 / 全国町村議会議員会

センターに来て四年目になりました。宮本武蔵じゃありませんが、「まだまだ修行が足りん！」ということでしょう。これからも県外の地域づくりについて、みなさんのお役に立てるよう、さらに修行していきますので、よろしくお願ひします。

これから暑い夏がやって来ますが、冷たいビールを飲み過ぎないよう、お身体には十分注意してくださいね。(橋岡)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に「舞たうん」編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動スタッフ

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

発行 / 平成十五年七月七日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷 / 三創印刷株式会社

☆ <http://www.ecpr.or.jp>

☆ E-mail: info@ecpr.or.jp

本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。